

東京銀杏会第 30 回トップフォーラム

(2025 年 10 月 18 日) のご案内

～第 2 弾～

2025 年の第 30 回トップフォーラムは、東京銀杏会・神奈川銀杏会・埼玉銀杏会・千葉銀杏会共催で 10 月 18 日（土）14 時から「AI 時代を多角的に理解する」をテーマに、東京大学ホームカミングデイのイベントとして開催いたします。参加ご希望の方は、東京銀杏会事務局までお申し込み下さい。なお、懇親会は独自には開催せず、希望者は東京銀杏会の懇親会「ワイワイ会」に参加していただくことにいたしました。

「AI 時代を多角的に理解する」

～その光と影にどう対処すべきか？～

コーディネーター : 松尾 豊 氏【東京大学大学院工学系研究科 技術経営戦略学専攻/
人工物工学研究センター 教授・AI戦略会議 座長】

パネリスト : 関根 正之 氏【ボストンコンサルティンググループ
アソシエイト・ディレクター】

: 鶴岡 慶雅 氏【東京大学大学院情報理工学系研究科 教授】

: 横山 広美 氏【東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構
学際情報学府 教授】

日 時 : 2025 年 10 月 18 日（土）	13 : 30	開場
	14 : 00 ～ 14 : 05	開会挨拶
	14 : 05 ～ 15 : 25	コーディネーター・パネリストの講演
	15 : 25 ～ 15 : 30	会場整理
	15 : 30 ～ 16 : 15	パネルディスカッション
	16 : 15 ～ 16 : 25	質疑応答
	16 : 25 ～ 16 : 30	閉会挨拶

会 場 : 東京大学本郷キャンパス 法学部 25 番教室

会 費 : 資料代として 2,000 円/人です。

なお、「ワイワイ会」の参加は別途 6,000 円/人です。

申 込 : 事前準備のため、10 月 11 日（土）までに、申込者氏名等を明記して、東京銀杏会事務局（tokyoichokai@gmail.com）あてにメールをお送りいただくか、同封のお申し込み用ファクス用紙にて、東京銀杏会事務局にファクスしていただけると幸甚です。

また、質問を事前に受け付けます。東京銀杏会事務局にメールまたはファクスをお送り下さい。

コーディネーター/パネリストの講演要旨

《コーディネーター》

松尾 豊 氏：東京大学大学院工学系研究科 技術経営戦略学専攻/

人工物工学研究センター 教授・AI 戦略会議 座長



AI が東大の理科三類の合格点を上回るなど、AI の能力はかつてないほどに高度化している。深層学習、トランスフォーマー等のブレークスルーを経て、AI は高い言語生成能力を獲得するに至った。

今後は自律的にタスクを遂行する AI エージェントと、生成 AI の汎用性を持つロボットが、人間の頭脳労働・肉体労働両面を高いレベルで代替すると考えられる。前者では、医療分野の電子カルテやレセプトの標準化・修正の自動化、後者では学習データを集め、汎用的な動作を実現するためのロボット基盤モデルづくりのデータエコシステム構築が進んでいる。さらに AGI (汎用人工知能) の到来に関する議論も活発化しており、2030 年以前の実現を見込む有識者意見も散見される。

社会への影響力を増す AI のガバナンスをめぐって、国際的な制度設計も活発化している。この中で日本はリスク対応とイノベーションの両立を掲げ、2025 年 5 月に「AI 推進法」が成立。情報収集、政府の司令塔機能の法定化など制度整備を進めている。

本トップフォーラムでは、このように目まぐるしく移り変わる AI の現在地と今後の見通しを概括する。

《パネリスト》

関根 正之 氏：ボストンコンサルティンググループ

アソシエイト・ディレクター



AI は、特に Chat GPT 等の大規模言語モデル/生成 AI が台頭して以降、技術の観点だけでなくビジネスの世界においても最重要事項と位置づけられている。また、国全体の競争力をも大きく左右する重要な論点として政策レベルでも多くの国で活発な議論がされている。

日本においても国/民間、技術開発/社会実装などの各層において活発な議論がされている。特に技術開発においては、国による積極的な支援策にも助けられ、米中等のレベルには未だ遠いものの、一定の成果がつつある。

一方、社会実装に関しては、議論はされているものの、民間企業また行政機関などにおいても日本では他国と比較して AI の活用が遅れていると言われている。実際に筆者の属するボストン・コンサルティング・グループまた他の調査においても遅れが明確に示されている。

このトップフォーラムでは、日本を始め世界各国での技術開発/政策検討/社会実装を知る立場から、日本の現状と今後進むべき方向性に関して議論したい。

鶴岡 慶雅 氏：東京大学大学院情報理工学系研究科 教授

与えられた文脈から次の単語を予測するという（概念的には）非常にシンプルな深層学習モデルに端を発した技術革新が、様々な知的処理に適用可能な人工知能（AI）技術として、産業や人々の暮らしに大きな影響を与えつつある。大規模言語モデル（LLM）、生成 AI、AI エージェント、フィジカル AI といった用語を紙面で見かけることも珍しくなくなった。

これらの AI 技術は、科学技術の発展や企業活動の生産性向上、様々な社会課題の解決などに大きく資することは疑いなく、すでに、生成 AI を活用した研究・教育や、AI エージェントを利用した業務の効率化・自動化など、社会の様々な場面での AI の活用が進んでいる。一方、AI の悪用、バイアス、AI への依存、AI によって失われる仕事など、社会に対する AI のネガティブな影響も懸念されている。また、より長期的な問題として、AI の制御可能性に対する疑問も指摘されている。本講演では、大規模言語モデル、生成 AI、AI エージェント等に関する研究開発動向を概観するとともに、AI 技術の発展と普及がもたらす学術的および社会的な影響について、正負両面から議論する。



横山 広美 氏：東京大学国際高等研究所

カブリ数物連携宇宙研究機構 学際情報学府 教授

AI を人文社会科学で議論する際に感じる困難は、推進と抑制の両極を扱うことにある。推進の議論では、DX すら遅れている日本の産業界にいかに早く AI、それに続いて AI エージェントを導入していくのかを扱う。技術導入の遅れはいまに始まったことではないが、強力なリーダーシップと使いやすさが連動していることは知られている。加えて、AI はエージェントになり判断を自ら行うようになった。責任の所在をどう考え、導入をしていくのか。

反対に抑制に関しては、AI が人間を支配する日が来ってしまうかもしれないという懸念がある。すでに核開発にもなぞらえる AI 開発は、顔認証を高度化させ、ドローンを合わせることで大人数を殺戮している。そして、こうした研究は、日常の研究現場と地続きなのである。さらに AI を使うことでデータセンターの増設が続き、二酸化炭素はさらに増え、いまや AI 倫理の「第 3 の波」は、サステイナブル AI というレッド AI をグリーン AI に変えていく試みである。こうした両極のはざまで、科学技術の民主化をうたってきた科学技術社会論研究者の悩みを共有していきたい。

